

吉澤義則 編

未刊國文古註釋大系

第五卷

清
文
堂

未刊国文古註釈大系（全十八卷）第五卷

昭和十三年六月二十日 初版発行
昭和四十三年十月五日 複刻版発行

編纂者 吉澤義則

発行者 前田勝雄

製版者 京都市下京区柳馬場四条通下

光綾写真製版株式会社
能登英夫

印刷者 京都市南区東九条南石田町一

朝陽堂印刷株式会社
高橋清二

製本者 大阪市天王寺区勝山通一ノ一〇

倉橋製本株式会社
倉橋重男

発行所 大阪市南区二ツ井戸町十五
清文堂出版株式会社

振替 大阪六二三三八
電話 四六二六五（代）
郵便番号 五四二

未刊国文古註釈大系 第五卷 目次

後撰和歌集増抄
拾遺和歌集増抄

後撰和歌集增抄

缺
三
冊

萩
原
宗
固
著

後撰和歌集増抄開題

本大系の底本は松井簡治博士の所蔵にかゝる。現存三冊で、第一冊は集の卷第一（春歌上）・卷第二（同中）・卷第三（同下）を、第二冊は卷第四（夏歌）・卷第五（秋歌上）・卷第六（同中）を、又第三冊は卷第七（秋歌下）・卷第八（冬歌）を註解したものであつて、「或抄」をもとし、一字下げて補註を加へたものである。蓋し岸本山豆流がその著後撰和歌集標註に「季吟の抄を本として補へるものにて参考とするに足る。但し世に極めて稀なり」とある「後撰集増抄 二十卷」と今本ではなからうか。然らば現存三冊本は零本で、第四冊以下若干冊を以て集の卷第二十迄註解した完本がある筈である。

本書の著者に關しては、本大系の底本第一冊の表紙に「宗固先生遺稿」とあるので、萩原宗固の著作と見られる。宗固は別に「拾遺和歌集増抄」の著もあることゝて、宗固の自筆稿本と見ることは内容から見ても異論はない。前

掲由豆流の標註は「後撰集増抄二十卷」に著者名を記してはゐないが、標註には安永二年宗固が慶長本によつて校合した本を参照してゐる。

萩原宗固は、元祿十六年（三六五）江戸市谷本村比久尼坂の鈴木家に生れ、四谷左門町の萩原家の養子となつて、世稱を七左衛門、俗名又三郎、百花庵と號し、源貞辰ともいふ。和歌を烏丸光榮・同光胤・武者小路實岳・僧亨辨・冷泉爲村等について習得し、家集「志野の葉草」三卷が刊行せられてゐる。はじめ與力として召出されてゐたが、曾我七兵衛組の節病氣に付、忤七右衛門を番代に差出してゐる。晩年は四谷荒木横町に家を移し、齡八十二の折、天明四年（一四四四）五月二日に歿し、四谷南寺町本性寺に葬る。法號詠知院、著書は前掲「志野の葉草」や「拾遺和歌集増抄」の他、「蜻蛉日記註釋」もある。門下には歌人横田袋翁や有名な塙保己一等の駿足がある。

後撰和歌集卷第一 歌數 四十六首

春歌上 飛井家本正月一日同本末本校元日に

元日に二條のきさいの宮にて白きおほうちきをたまはりて

藤原敏行朝臣

作者等類云按察便首
十九子大内記人四首

古來風録二入
ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおどろかれぬる

敏行集正月一日二條中宮にしてしろきおほうちきを給りて云々
俊頼口傳云みのしろ衣といへるは雪のふる上にかい／＼しくきた
るなんみのしろとおぼゆるとよめる也春きにけりといへるは春の
はじめなればとてことさらにとおほうちきを給りたるがめづら
しさに春來にけりとはよむにや 奥義抄云しろき衣といはんとて
ふる雪のみのしろ衣とよめるをやがてみのしろ衣とそへそへたる
にや雪のふるにうへにうちきたればみののかはりとおぼゆるこゝ
ろなり略又云みのしろ衣とは取物の具にあるあまきぬをいふにや
ともおほゆ僻案抄云降雪のみのしろ衣とつづけたる雪のふれば義
をきるべきかはりに白きうちきをきて春來にけりとをどろかるゝ
とよめる歟萬葉集にはみのしろ衣といふことみえざるにや此集に
はみのしろ衣ぬはずともきよとよめるは中原宗興此歌の後によめ
るとみゆ又古歌とてせなためみのしろ衣打時ぞ空ゆくかりの音

もまがひけると歌のさまもふるくは聞えず遠人のためみの代衣と
よめるにや蘇武耽^{通考}葬などを思へる歌なれば上古の歌とはみえず
色葉集云みのしろ衣とはみのの代にきる事をいふ義代なり 八雲
御抄云みのしろ衣ふる雪のこ雪のふる上にきるといふ心也基俊
歌にもよめり同心也 紫のみのしろ衣と狭衣歌なり所詮只衣也そ
れを義にも寄たる也又云みのしろ衣の雪にふるにうへにみののし
ろにきると云也さらに無子細而或説に有本説云々誠に叶例所は何
れとも心不可信其儀只自然事歟孝武帝大明五年正月朔日雪降日江
夏王義恭衣をもちて雪をうけん垂の花をなして瑞とす帝甚よろこ
び給ふ之衣をもてすといへり或抄八雲御抄を引て
釋せり故に略之

後撰正義説大概僻案抄に同故不載之狭衣物語第一御製に身のし
ろも我ぬききせんかへしつと思ひなわびそ天の羽衣返歌狭衣中
將むらさきのみのしろ衣それならばとめの袖にまさりこそせ
め一禪御説にみのしろ衣はみのをきるべきかはりわきたる衣を
云也又古歌のみのしろ衣は身代とも聞え侍りと書せたまへり今
川了俊説にみのしろ衣は義になずらへてきる也又は身の代衣な
とももの事なり云々爲家集歌けふも又みの代ころも春たつと猶う
ちきまし雪はふりつゝ白大褂源氏桐壺卷云しろきおほうちきに
御ぞ一くたり河海抄云一説皆有二大小二着二衣上云々うはぎのう

へにうちきをきる也いろかさねはきぬにしたがふ長さ小袖とひとし中へらしあり

春立日よめる 飛鳥井家本三字脱

金五八入

凡河内躬恒作者部類延喜十一年任淡路權様入廿三首 春たつと聞つからに春日山きえあへぬ雪の花とみゆらん

躬恒集不載之或抄云心は明なり

兼盛王作者部類兵部大輔寛行子駿河守大和物語前權守

けふよりは萩のやけはらかきわけてわかななかつまんと誰をこそはん

或抄云萩のやけはらは野をやくに萩のやけのこりたる所也けふよりはといふに初春におもむきてのどかなるころ侍にや又云春來て野遊おもしろきなれば若なつみにと誰をこそはんとよめり

兼盛集不載之大和物語云むつきのついたちころ大納言殿に兼盛まいたりたりけるに物などのたまはせですづろに歌よめとのたまふければふとよみたりける此集に同じとよみたりければになくめで給ふて御返ししかた岡にわらひもえすはたつねつゝ心やりにやわかなつまゝしとなんよみ給ふ 清輔袋草紙に以兼盛歌一稱兼盛王歌二首の内也云此集或本には兼盛或本には兼盛大君と書是和謔之人直せる歟凡書の僻事荒涼不可直云々

ある人のもとにみまいるの女の侍けるが月日久しくへてむ月のついたり比にまへゆるされたりけるに雨のふるをみて

よみ人しらず

しら雲のうへしるけふぞ春雨のふるにかひある身とはしりぬる或抄云春雨のふるに經るをそへたり雲の上を知とは御前をゆるされたる事也月日をふるかひある身ぞとや

古今六帖第一兩作者不載之詞花集雜下ににみまいるして侍ける女のまへゆるされて後ほとなく身まかりにければよみ給ける四條中宮くやしくもみそめけるかななへて世の哀とはかりきかましものを

朱雀院の子日におはしましけるにさはる事侍りてえつかうまつらずして延光朝臣につかはしける 左大臣小野宮

松もひき若なも摘ずなりぬるをいつしか櫻はやもさかなん

或抄云朱雀院は寛平法皇也延光朝臣は明親王子也左大臣榮花物語に天曆の左大臣を實賴公云々はやもさかなんは早くさけとなり子日せぬ 花をだにみんとなり

飛鳥井家本ひだりのおほいまうちきみ作者部類云清慎公實賴號小野宮貞信公子後撰左大臣入八首

院御返し寛平法皇歌猶可考

まつにくる人しなければ春のゝのわかななものもかひなかりけり

或抄云左大臣のおはせぬことを待にくる人しなければとよませ給
松を待に添て也何もは押こめたる儀なり

子日におとこのもとよりけふは小松ひきになんのべにまかり出
るといへりければ

よみ人しらず

きみのみや野べに小松をひきにゆく我もかたみにつまんわかなを
或抄云われもゆきてたがひに野遊せんものをといへるこゝろの下
句也かたみは籠に若菜をつみ入る事なればいひかけしなり

正義云かたみはたがひにと云心也籠をかたみといふにそへた
るなるへし 和名抄云四聲字苑云冬簪漢抄云賀太美小籠也新古今集春

上紀貫之往てみぬ人もしのべと春の野のかたみにつめる若な
りけり

題しらず

古今集たなびく野への
大春霞たなびく野への
霞たつ春日の野邊のわかなにもなりみてしがな人の摘やと

或抄云人にも愛せられぬ人の述懐なるべし若菜ならば人もつみは

やさんものをとのこゝろなり

此歌古今集俳諧歌に入寛平御時きさいの宮の歌合のうた藤原の
おきかぜと有り菅家萬葉春歌ハルナミチクサノハナ春霞起出留野邊之若菜丹裳成見手ハルナミチクサノハナ

芝鉤人シバカギ裳摘モリ八斗宗祇云序歌なりつむとはなつさふこゝろなり見
てしかなとはねがふ詞也
一本のものとに飛井本人のものとに
子日しにまかりける人にをくれてつかはしける

みつね

はるのゝに心をだにもやらぬ身はわかなもつまでとしをこそつめ
本わかなはつまで

躬恒集不載之或抄云春野に身のゆかぬのみならず心をだにやらぬ
身はと也人は春遊に心ゆく氣色なれど我は時にあはて野遊にも心
ゆかで年をつむと也

古今六帖第四わかなみつね春のの心をだにもやらぬ身はわか
なはずまん年をこそつめ

新古今集春上俊成澤に生ふる若菜ならねどいたずらに年をつむ
にも袖はぬれけり

宇多院に子日せんとありければ式部卿のみこそさふとて
宣明親王也をイ

行明親王或抄宇多院皇子重明
親王斯云々入二首

ふるさとの野へ見にゆくといふなるをいさもろともになかなつみて
ん

或抄云宇多院と西京なれば古郷の野へ見にゆくと なり寛平の子
日におはしまさんとなればいざもろともにまいらんと兄みこをこ
そひ給ふなり

作者部類云行明親王上野大守延喜第二皇子實は寛平第十皇子母
京極御息所飛井本勘物云延喜親王實寛平第十母京極御息所朱校
云本二無拾芥抄云宇多院西京土御門北木辻東此小路當東洞院法
皇御所刑部卿源湛宅云々或抄云西京宇多小路但北小路當町尻東
行

はつ春の歌とて

紀友則大内記
八七五

水の面にあやふきみだる春風や池の水をけふはとくらむ

友則集卷頭春立日歌此集に
おなじ或抄云白氏文集に池に有波文二氷盡開と

ある心なるべし水の面にあや吹みだるすなはち波の文なり

正義云水の綾は水の愁に似たる興也波の文也文をばあやとよめ
ばなり菅家萬葉に水之上丹文織素春之雨山之絲緒那倍手染濫伊勢

集古今水の面にあやたりみたる
春雨や山のみどりなべてそむらん

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらず

ふく風や春たちきなとつげつらん枝にこもれる花さきにけり

或抄云枝にこもりし花もやうく咲出しは春を風の告たるにやと

也風に花は開くものなればかくいへるにや此歌童蒙抄云先遣と和

風一報蛸息と云待の心か云々

菅家萬葉春歌吹風哉春立來沼砥告貫牟枝丹牟禮留花拆丹藝里古

今六帖第春風作者不載云々寛平后宮宗祇云七條后は昭宣公女に
て歌よみてましましければ此御事にや又延喜母后御事にや可勘
之云々延喜御母生内大臣高藤公女胤子と爲家抄にみえたり

しはすばかりにやまとへことにつきてまかりけるほとにやど
りて侍ける人の家のむすめをおもひかけて侍けれどもやんこ
となき事によりてまかりのぼりにけりあくる春におやのもと
につかはしける

みつね

かすが野におふるわかなをみてしより心をつねに思ひやるかな

或抄云彼大和の女を春日野のわかなに比したり心は明也此歌戀也
戀の歌の四季にも雜にもまじる事此集の習ひとみゆ

正義云ことにつきてはつみせられたるにはあらざおほやけの御

使に付也ことには言の字也風夜在公などいへり云々やんごとな
き或抄云彼おほやけこと只にやむべくもあらでそのことにて上
りしにや云々此集歸旅部にも中原興歌の詞書にやんごとなき
事によりてまかり立ければとありえとままるまじき事あるをい
へりかげろふ日記にはやむことあるといふ言もありと或人いへ
りかれにけるおとこのもとにそのすみけるかたの庭の木の枯
たりける枝を折て遣しける

兼覽王母イ女

作者部類
兼覽王女入一首飛
鳥井本
かねみのわりのむすめ

もえ出る木のををみてもねをなくかれにしえだの春をしらねば

或抄云兼覽王は四品惟高親王子也其母誰ともなし一たび枯たる木は春といふこともしらでかれ果れば萌出る木の芽をみても我に離れたる人の二たび立歸る事はあらじと思ふに付てねをなくとなり女の宮つかへにまかり出て侍けるにめづらしきはこれかれものいひなどし侍けるをにイほどもなくひとりにあひにければむ月のつゐたちばかりにいひつかはしける作イ

よみ人しらず

いつのまに霞たつらんかすが野の雪だにとけぬ多とみしまに

或抄云いつの間に一人にあひそめけんまた誰にもとけぬ人とみしまにといはんとてかくよめり

題しらず

古案風集二入
なをさりに折つるものを梅花こき香にわれや衣そめてん

閑院左大臣冬嗣
け古案風集一本三

或抄云なをざりは等閑又尋常とも書也大かたなどいふ心なり此歌は梅かかの深き事をよめり大形におりしものを梅香の深ければ此香にくく我衣をそめんかと也香にしむるを染るとよめるなるべし閑院左大臣作者部類に冬嗣右大臣内磨子云々入三首或人云此集本院左大臣を贈太政大臣と載たれば冬嗣公をも閑院贈太政大臣と載べきにや 文徳實錄第二云嘉祥三年秋七月丙子朔壬辰追崇

外祖父左大臣正一位藤原朝臣冬嗣爲太政大臣云々 古今六帖第八梅閑院太政大臣なをざりに思ひつるものを梅の花こきかに我やことしくみなん

前栽に紅梅をうへて又の春をそく咲ければ

イイ集言
藤原兼輔朝臣朱校本中納言トアリ 左中將利基號堤中納言

やとちかくうつしてうへしかひもなくまちどをにのみ匂ふ花かな
或抄云近と遠きを對してよめり宿近きかひもなく待遠なるとなり

兼輔集他本歌兵衛の司はなれて後まへにこうばいをうへて花のをそくさきければ歌此集に同じ大和物語云をなじ中納言かのとのへしんでんのまへにすこしとをくたてりけるさくらをちかくほりうへの給けるがかれさまにみえければ歌此集に同じ 詞書此集には違へり

飛鳥井本藤原兼輔朝臣勘云中納言右衛門督承平三年薨云々

延喜御時歌めしけるに奉りける

紀貫之作者部類云天慶九年卒入七十五首

實之集不載之
春霞たなびきにけり久かたの月のかつらも花や咲くらむ

或抄云春くれば萬木の花も咲べきに空に霞もたなびけば月の桂も花さかんと也たけたかくしてまことに歌の本體とみゆ

顯注云久かたの月のかつらも秋は猶もみぢすればや照まさるら

むこれは忠岑歌也但後撰貫之歌には春霞たなびきにけり久かたの月のかつらも花や咲らん此等二首の心月桂は春花さき秋もみぢすべきにや以言侍には桂花秋白作りたれば花は秋さくぞと聞えたれどよのつねの花もみぢになぞらへて先二首はよめる歟可尋云々密勘云月桂の花以言侍によりて秋ばかりにも難一叟桂花とは月の名也歌にはさしもあらぬことをも思ひあてをしはかるやからにのみこそ讀侍めれ

おなじ御時みづし所にさぶらひける比しづめるよしをなげきて
鴨山平天發本校仰らんせしめよ
御覽せさせよとおぼしくてある藏人にをくりて侍ける十二首がうち

みつね

いづことも春の光はわかにまたみよしの山は雪ふる

或抄云御厨子所は朝夕の御膳を供す別當影所なほ有り歌の心君の御恵は遍けれども我身はいまだその恩澤にあつからぬをぞよめり躬恒集卷頭延喜の御時にみづし所にさぶらひしにつかさめしの比ともにをくれたりしかば御らんぜさせよとおもひてあるをんなくら人のもとにやり歌此集御厨子所拾芥抄云四位殿上人爲別當以三民部大輔五位爲歌此集預也在後涼殿西庇云々下略
人のもとに遣しける

白玉をつつむ袖のみなかるゝは春はなみだもさえぬなりけり

いせ 作者部額大和守鑑
藤安入五十八首

或抄云安部清行がつゝめども袖にたまらぬ白玉は人をみるめのなみだなりけり此歌をうつしてよめるにやしら玉は泪の玉也かくつゝむ袖のみわりなくながるゝは春は氷もとくれば泪もさえずぬるむにこそはとなり

正義云春はなみだも寒氷らずとなり非凝心也伊勢集云春ものおもひけるに櫻ばな匂ふともなく春くればなどかなげきのしげりのみするしら玉をつゝむ袖のみながるゝは春はなみだもさえぬなりけり古今六帖第五たま作者不載之春は涙のさえぬなりけり人にならずられて侍ける比雨のやまずふりければ

よみ人しらず

春たちて我身ふりぬるゆくイながめには人の心の花もちりけり

或抄云春來て年もふりゆく身には人の心もうつりかはる歎きをよめりふりぬるながめは雨をそへたり小町か我身よにふるながめを本とせるにや

古今六帖第一あめ作者いせ歌此集伊勢集此歌不載云々

題しらず

わがせこにみせんとおもひし梅の花それとも見えす雪のふれば

或抄云我背子は夫の事也心は明也萬葉の歌也

萬葉集第八山部宿禰赤人吾嬬子爾令見常念之梅花其十方不所見
雪乃零有者古今六帖第一雪作者赤人歌此集に赤人集此歌不載之古

來風琳に山邊赤人と有り

きてみべき人もあらじな我やどの梅のはつ花おりつくしてん

或抄云僻案抄云きてみべききてみるべきといふなり

家持集來てみべき人もあらじを我やどの下句此集におなじ

ことならば折つくしてん梅花我まつ人のきても見なくに

或抄云如此ならば也かく待人も來ぬとならばとなり

顯注云ことならばといふは同じくはといふ心也ことはといふも

同詞也かきくらしことはふらなんともよめり密勘云ことならば

とはかくの如くならばといふ詞とぞ聞侍し抄同或人云ことなら

ば常に殊ならばと云心にや萬葉に殊放者殊落者書菅萬に殊者根

佐倍丹と書せ給へり源氏柏木卷にことならばならしの板になら

さん葉守の神のゆるしありきと

ふく風にちらずもあらなん梅の花わがかりごろも一夜やどらん

或抄云風にちらずもあれかし我狩衣を一夜宿してにほひをとめん

ものをとなり

正義云梅花に衣をやとすと云事見古今註云々進可考朱校本吹風

に吹ちらてまたなんと有り

わかやどの梅の初花ひるは雪よるは月とも見えまがふかな

或抄云心明也

正義云梅の花の白き白晝は雪とも夜は月と見えまがふなり飛鳥

井家本よるは月ともみえわたるかな

梅の花よそながらみんわきもこがとがむばかりのかにもこそしめ

或抄云梅に近づかばにほひうつりて誰とねしうつり香ぞと女のと

がめもやせんによそながらみんとなり

此歌拾遺集第一春部に入れり題しらずよみ人しらず歌此集古今

集春上梅のはなたちよるはかりありしより人のとがむる香にぞ

しみける後拾遺集能宣梅の花にほふあたりの夕ぐれはあやなく

人にあやめられつゝそせい法師良岑宗貞子入七

梅のはなおればこぼれぬわが袖に匂ひかうつせいへづとにせん

或抄云家土産に折ればこぼるゝほどに只袖に匂ひ香をうつせ家づ

とにせんと也匂ひ香今はよむましきよし爲家卿説にみえたり

古今六帖第六梅素性歌此集に素性集にほひはしつれ家づとにせん

と有り

おとこにつきてほかにうつりて

よみ人しらず

こゝろもておるかはあやな梅の花かをとめてだにとふ人のなき

或抄云爲家抄にあやなはあぢきなしと也我心を以て外に居る事は夫につれられての事はせんかたもなきに梅がかをとめてだに故郷人のとはずうとむぞあじきなしと也

正義云心もてとは心からと云同心也以と云義也あやなは無益と云也此折は居心に添たりとおほゆ

としをへて心かけたる女のことしはかりだにまちくらせといひけるが又の年もつれなかりければ

人こゝろうさこそまされ春たてばとまらずきゆるゆきかくれなん

或抄云きゆる雪とそへてなりうき人心を世に在てみんよりは隠遁すべしと也

古今集雜下よみ人しらず世の中のうけくにあきぬおく山の木の葉にふれる雪やけなまし源氏まほろしまて歌にうき世にはゆき消なんとおもひつゝおもひの外になをそほどふる

題しらず

梅花香を吹かくるはる風にこゝろをそめば人やとがめむ

或抄云匂ひにしめたらば人のうつりがとやとがめんと也

春雨のふらば野山にまじりなむ梅の花がさありといふなり

或抄云野梅山梅の陰にかくれんとこのこゝろなるべし

此歌古今六帖第一入雨或本實之春雨のふらば山べにまじりなど有り

催馬樂歌あをやぎをかた糸によりて鷺のぬふてふ笠は梅の花かさ六帖第五ちるまではきてもみるべく春雨に我をぬらすな梅の花笠

秀歌六體に入うち懸らし
かきくらし雪はふりつゝしかすがにわがいへのそのにうぐひすぞな

く

或抄云萬葉の歌也しかすがにさすがに也雪は多めきながらさすがに春のうぐひす鳴と也

萬葉集第八大伴宿禰家持打霧之雪者零霰然爲我二吾宅乃苑爾鷺鳴裳拾遺集春部うぐひすをよみ侍ける大伴家持うちきらし雪

はふれどもしかすがにわが家のそのにうぐひすのなく六帖作者不載之うちきらし雪はふりつゝしかすがに我家の園にうぐひすなきつ僻案抄云しかすがはさすがにと云同詞也云々朱校云本無云々

谷さむみいまだすたらぬ鷺のなく聲わがみ人のすさめぬ

或抄云嫩鷺やすさめぬは不愛也

顯注云すさめぬとは興せぬ詞也世俗の詞に興うせぬをすさめぬと申は別の事也云々八雲御抄云すさむるめでぬなり又人もすさめず駒もすさめずといへり兩説なり

鷺のなきつる聲にさそはれて花のもとにぞ我はきける

或抄云白氏文集ユノ覺ノ謠ヲ引キ來キ花下ハナノの心也我といふ詞一字の歌也古詩にもあるごとく我はさそはれ來たるよしのこゝろなり古今六帖第六うぐひす作者不載之歌此集に同じ

花だにもまたさかなくに鶯のなく一聲をはるとおもはむ

或抄云鶯ばかりに春のしるしをみる心なるべしまださかなくには咲ざるにとなり

君がため山田の澤に多くつむとぬれにし袖はいまだかわかず袖中抄雪けの澤に多くつむとぬれし袖は

或抄云此歌萬葉には下句雪けの水にもすそぬらしつとありこゝろ明なり

萬葉集第十作者未詳爲君山田之澤キミノカタノヤマノノ惠具ユヅメ探跡ウツミ雪消ユキノ之水ミヅ爾裳ニモ裾所スロ沾シ古今六帖第六多く作者不載之あし引の山田の澤に多くつむと雪けの水にもすそぬらす袖中抄云多くとは女姿と書てゑことよめりくこと同音也花すはうに咲草の水邊にある也或は多くとは芹を云といふ義あれと六帖には芹の外に別に多くをあげたり但ふるき文はくわしくあきらめずして物の異名をもたまさす名のかはりたれば別にかける事もあれば一定にあらず略童蒙抄云多くとは人のくふ草なり又多くと書る所を萬葉にせりとよめりされば多くとせりとはひとつものの名とみえたり正義云古説云多くとは物別若菜の名也會供と書也正月七日白馬節會にはしめ

て若菜を奏進すれば會供という也云々或人云多くは芹也芹にもあぐき味あるゆへに味につきて多くといへるなるべし重具之事別記之あひしりて侍ける人の家にまかれりけるに梅の木侍けりこの花咲きなんときかならずせうそせんといいひたるををとなく侍ければ

朱雀院の兵部卿のみこ入一首

梅の花いまはさかりになりぬらんたのめし人のをとつれもせぬ

或抄云消息せぬをとがめて也

飛鳥井家本勘云三品兵部卿敦因イ寛平第五延長四年九月十日薨云

々作者部類云敦慶親王宇多第五皇子號桂御子三品兵部卿延喜四年薨イ猶可乎或もとよしと有は誤なるべし

返しイ光

イ中納本言紀長谷雄朝臣入四首

イ雨春風イ雨にいかにぞむめや匂ふらんわがみる枝はいろもかはらず飛鳥井本言

或抄云春雨にいかにぞや其元には梅の匂ひゆき候やらん我みる枝は咲氣色なきゆへ音つれをも申ざりしと也

飛鳥井家本勘云中納言紀長谷雄朝臣延喜二年參儀左大辨中納言イ十二年十一月薨六十八云々作者部類云彈正忠扶範子國守孫云々春の日ことのつゐでありてよめる

よみ人しらず

梅の花ちるてふなべに春雨のふりてつゝなく鶯のこゑ

或抄云ちるてふなべにはちるといふからに也春雨はふりてつゝといはんため也僻案抄云物の聲のしらべあげてきこゆるをふり出てといひ習へるとぞきこゆる云々雨に落る梅を惜て鶯のなくこゝろ也我惜むこゝろよりうくひすをかく云なるべし

正義云師説曰紅のふり出つつとおほくよめるは布を染るにふりいてと言物をよむと釋するもあれどなにも物のこゑのしらべあけて聞ゆるをふり出てと言習へとぞうち出る聲は鈴虫ならねどふり出るやうに聞ゆる也なへとはちなみにと云心也因字也古今集にいなおほせどり鳴なべにと云おなじこゝろなり私云師説ト云ル僻案抄説也

かよひ住侍ける人の家の前なる柳をおもひやりて

みつね

朝型集不載之
いもが家のほひいりにたてる青柳に今やなくらんうぐひすの聲

或抄云僻案抄云はひ入に立る門のいり口をよめると聞ゆ云々愚案門柳也なくらんは相像るをなり

正義之説僻案抄ニ同

松のもとにこれかれ侍てはなをみやりて

坂上是則作者都類云田村將軍後入五百

ふかみどりときは松のかけにゐてうつろふ花をよそにこそみれ
或抄云松の不變の愛すへき心をふかくいへるなり

是則集云松のもとにこれかれ侍て歌此集に古今六帖第六松友則うつろふ花をよそにこそみめと有り天慶六年日本紀竟宴和歌得聖德太子右中辨藤原朝臣師尹さきにはふ花をばおきてとよとみ也松には見ます色なかりけり注云春日桃の花のあしたに父のみこ太子ともろともに園に遊び給ふにみことひてのたまはく桃の花をやたのしびとす云松の葉をやおもしろしとすると太子こたへたまはく松の葉をおもしろしとすみこ又とひたまふいかなればぞと太子こたへたまはく桃のはなはしばらくのものの松の葉はひさしき木なりそへにおもしろしとのたまへり云々太子傳云太子答之桃花一旦之榮物松葉萬年之貞木也故可賞之云々
朝型集不載之
おなじ心をよめる

花の色はちらぬまばかりふるさにとつねには松のみどりなりけり
或抄云是も松の不變を愛する心なるべし

此歌貫之集第四天慶三年四月右大將殿御屏風の歌廿首のうちに
入れりふるさとにいたれりと有りて下句つねにも松ぞみどり成
けりと有は古今六帖第六松貫之歌此集におなじ

紅梅の花を見て

みつね 躬恒集不載之

紅に色をはかへて梅の花かざことくにはほはざりける

或抄云色はよのつねにことなれど香は白梅にもことならずと色香具したるを賞するこゝろなり但源氏河海抄には此歌を紅の色にとられてと書れて色も珍しけれど香はことくには具せずとの心とぞ可隨所好歟

古今六帖第六こうばい作者貫之と有り貫之集第四天慶三年四月右大將殿御屏風の歌廿百人の家にこうばいあり歌此集に同じ不審或人云菅萬に秋の露色ことくには置とはと云歌の第二句いろことくにはと有て色殊殊丹と書せ給へりことくには俗に面々にと云心なりことくは略語と云説は心得かたし貫之歌にさくらはなちらぬ松にもならはなん色ことくにはみつつ世を經ん

これかれまとゐさげたうべけるまへに梅花に雪のふりかゝりけるをにイ

貫之

貫之集不載之
ふる雪はかつもけななんうめの花ちるにまとはず折てかさゝんて未校本
或抄云ふる雪は且々きえよふれば落梅にまがひて折がたければ消たらんにまどはず折かざさんとなり

兼輔朝臣の閨の前に紅梅を植て侍けるをみとせばかりの後花さきなどしけるを女ども其枝をおりてみすのうちよりこれをばいかかといひ出しければのなまやしにせり簡島井本

春ごとに咲きまさるべき花なればことしをもまたあかずとぞみる思ふ簡島井本

始て宰相になりて侍ける年になん或抄云長壽廿一年正月癸酉中將如元簡島井本同

或抄云猶昇進すべき兼輔卿なれば宰相にても満足せずとのこゝろを花に添てよめるなり

貫之集第六藤原のかねすけの中將さいさうになりてよろこびにいたりたるにはじめてさいたる紅ばいをおりてことしなん咲はしめたるといひいだしたるに歌此集に同じ